

ミュンヘン大学語学研修の記録

2016/04/02

ミュンヘン大学語学研修を実施する意義

学生たちは、このミュンヘン大学語学研修から沢山の学びを得た。プログラムの事前学習で野口 薫先生より、事前にドイツ語の基礎を学ぶ、プログラムの中では、安全と危機管理を学んだ。本年は、世界的に不安定な状況がつづきヨーロッパへの難民受け入れなどがあり安全を確保する事に力を注いだ。事前学習の中で、ホームステイ先であるミュンヘンの家族にプロフィールを送り出発前よりライフラインを繋いだ。このことにより、ミュンヘン到着後もスムーズに家庭に入ることが出来た。また、ミュンヘン大学側の受け入れ態勢も日本センターの笠井先生ならびにVIVのマウ先生を中心に綿密な計画がなされていた。本年は野 薫口先生、高橋慈海次長の訪問もあった。

これらの中に大正生は、プログラムを熟し乍ら、文化、芸術、観劇など一つ一つ体験と経験を繰り返し成長していった。研修に参加することで、広い視野と人間力を身に付けて行った。この研修において、学生たちは幅を広げていった。

もう一つ学生たちは学んできている。社会性― 同じ目的を持った学生が7名集まり、協力しながら行動をすること。ホームステイを通して自分思いだけを通しては、何もうまくいかないことをまなび、家族という中で自分を見出すこと。その中で社会適応能力を高めることで自分を成長させることが出来ること。時間を守り、約束事を守り、自主的に行動すること、これは、今の若い人々が最も苦手とすることを、語学研修の集団の中で学ぶ。

ミュンヘン大学語学研修を通して学ぶことはたくさんある。

内向化が進む大学の中で

日本の学生に「内向化」が進み、その結果「海外に出ない」「留学は面倒」「わざわざ苦労するのは」という学生が増加傾向にあることが報告されている。確かに、大正大学においても同様の動きや傾向がここ数年見受けられる。特に男子学生の内向化は顕著になっているように思われる。この主な原因は、他大学でも同じであろうが、大学生活の中で時間的な余裕と金銭的な余裕が持てない学生と言語での障壁が、その原因となっているように推察される。しかし、実際に、現地で見ること、聞くこと、触れることで本物を知ることになります。その結果として、このプログラムには、歴史、伝統、芸術、絵画、音楽が欧州の香りがあり、参加する者の満足度は高くなっていると思う。

本校が実施している「ミュンヘン大学語学研修」では、LMUの学生と交流しながら学んでいくことを大事にしている。

この号の内容

語学研修を終えて	1
各学生レポート	2
研修資料	3
付録	4

重要な日付

01/31	羽田空港に集合でした
02/12	ノインシュバインシュタイン
02/23	思い出の写真



ドイツと聞くと、技術や医学の先進国であり、環境問題にもとても積極的に取り組んでいる国としてプラスなイメージが強い。第二次世界大戦での敗戦国という日本との共通点ももっている。その一方では、ドイツの戦後からの立ち直り方は日本とはまた異なっている。そういった多くの点が、日本から遠く離れたドイツに対して私の興味と関心を湧かせた。

美しきミュンヘンの街

ミュンヘンに来て真っ先に感じたことは、ミュンヘンはとても美しい街ということだ。歴史を感じさせる西洋ゴシック様式の建築物がいくつも立ち並んでいる街並みももちろんだが、街の衛生環境という点にも大きく関心をもった。人口が集中している場所でさえ綺麗に整備され、ゴミの処理方法にも日本以上に厳密な分別がされていた。自然の保護にも配慮がされており、特に英国庭園という巨大な公園には多くの緑があり、多種多様な動物も生息している。ミュンヘンは環境への配慮が徹底された街であり、人々や動物の暮らしている姿はとても活き活きとしていた。

日本と比較してミュンヘンでの物価は高く設定されているが、見方を変えれば経済状況が良好としても捉えることができるだろう。多くの品が日本より高値で売られながらも、ビールの価格は予想を上回るほどの安さだった。水よりもビールの方が安いという話を日本で耳にはしていたが、実際にみたことによってとても驚かされた。

街の人々の接し方も日本とは異なっていた。例えば、日本では飲食店などにおいては店員がお客に頭を下げることが多い。それに対してドイツでは店員とお客でも対等な立場で接しているように感じた。相手を対等として扱うことによって、お店でもドイツの人は積極的にコミュニケーションをとってきた。中には日本人の私に「コンニチワ」や「アリガトウ」と日本語で挨拶してくれる人もいた。日本から飛行機で12時間もかかるほど離れた国で日本の挨拶が知られ、つまり日本の文化がドイツで受け入れられていると考えるとうれしく感じた。文化や社会が違えば人々の性格も異なっており、

日本という国のしくみや人々の性格が世界的に見て当たり前ではないということを実感することができた。それによって日本という国を内側だけでなく広く外側からの視点をもって見直すことができ、自身の視野が広がったことを実感した。

この語学研修に参加した中で自身の活力となったのが、外国人とのコミュニケーションに対する恐怖心の克服という意味であった。以前、日本でドイツからの留学生と対面した際にほとんど話をするのができずにトラウマとなったことがあった。それは言語の問題もあったが、その大半は人とのコミュニケーションをする力の不足にあった。コミュニケーションに対する恐怖心の克服という目標は、語学研修を通して期待以上の成果を得ることができた。

楽しみながら学ぶ授業形態

ドイツでの授業はもちろんドイツ語によって進行された。そのため、先生の話を理解することはそう簡単ではなく、常に頭を使い、わからない言葉があればすぐさま辞書を引くことがドイツでの日常だった。ドイツ語が少しでも上達するために、授業外にも先生に積極的に話しかけた。どのようにドイツ語を話せばよいかわからないうえ、私の質問に対する先生の回答を理解することも大変なことであった。それでも失敗を恐れず一生懸命に食らいついていったことで、自分の話がしっかり伝わるようになり、先生の話も少しずつわかるようになってきた。失敗を恐れずに踏み出すことが、学習するうえで何事においても重要であることを学んだ。

また、授業形態は「話す」「聞く」ということを主とした実践的な方法であった。実際に授業を受けてみるとドイツ語の歌やカードゲームといったものからドイツ語の学習が始まった。他には実践を想定した簡単な会話やジェスチャーでのコミュニケーションなども行った。こういったドイツ語の学習方法は、日本でやってきた文法や単語の暗記よりも、感覚的にドイツ語が身についていった。ドイツでの授業はとても楽しく、かつ効果的にドイツ語やドイツの文化を学ぶことができた。

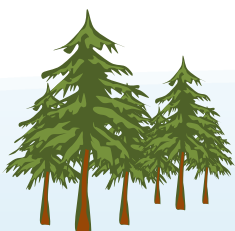
現地学生との交流

ミュンヘン大学の学生達とのコミュニケーションからも多くのことを学ばせてもらった。可能な限りのドイツ語で積極的に学生に話しかけると笑顔で返事をしてくれた。少しでも伝えることのできるドイツ語での質問が浮かべば、完璧で正確な言葉ではなくても、それを使うことによって何度も話しかけた。私の意図が伝わらないことももちろんあったが、それを続けていることで自分のドイツ語に自信がもてるようになっていった。

また、ミュンヘン大学の学生の中には日本語を勉強している方もいた。その学生達と日本語で会話をするという機会もあったが、多くのことを学ぶためにもあえて私はドイツ語での会話を試みた。必死で話すことで、相手も真剣に私の話を聞いてくれると同時に日本語のことについても質問してくれた。私がミュンヘン大学の学生からドイツ語を学ぼうとすることによって、ミュンヘン大学の学生も私から日本語を学ぼうと一生懸命になってくれた。現地の学生とのコミュニケーションは、互いの国の文化を理解し合おうと努力しあえることのできた充実した時間となった。

初めてのホームステイ生活

この語学研修の中でもとても貴重な体験となったことが、一人暮らしをしているマリクさんの家でのホームステイ生活である。食事や洗濯、入浴など家の決まりについて聞くも一度や二度では理解できずに何度も同じ事を尋ねた。また、私は複数の病気をもっていたために、そのことについても伝える必要があった。言葉だけでなくジェスチャーも同時に行い、言葉がわからない時はすぐさま辞書を引き、なんとしてでもマリクさんに自分の意思を伝えようと試みた。それに対して、マリクさんは何度も私の不十分なドイツ語の質問に真剣になって答えてくれた。意思が伝わり相手の言っていることがわかった時には、日本で普通に会話できたことが当たり前だった環境にはない喜びを感じることができた。言語能力に関係なく伝えることに熱意をもち、いかに自分が必死な態度になるかによって、どれだけ相手を真剣な気持ちにさせるかという対話における力を学ぶことができた。



ホームステイ生活によって、自身のドイツ語を向上させることもできた。その要因には、緊張感のある会話の中でドイツ語を身につけるというものであった。例えば、一度だけ帰宅時間がとても遅くなってしまった際にマリクさんへ連絡することを怠ってしまったことがあった。それによってマリクさんにはとても心配をかけてしまった。なんとしても心から謝りたいという一心で謝罪の言葉をドイツ語で考え、その意思をしっかりと伝えることができた。また、マリクさんの友人が家に訪れ、私と一対一で話すことになった際には色々なことを質問されて戸惑うこともあった。その時には常に辞書を片手にもちながら、失敗を恐れず答えていくと何度も相槌をうちながら話を聞いてくれた。そういった経験からも、限定的な状況での会話において言葉を学ぶということの重要性を知ることでもできた。

ホームステイが始まって一週間ほど経つと、ホームステイ生活に慣れていくことで、その状況に自身の安寧をおくようになっていった。会話がなければその場には沈黙しか残らなくなる。そのことに対して危機感をもつと、マリクさんと会話をする機会を増やすよう工夫をした。積極的に食事の準備やゴミ出しなどを手伝うことで会話をした。何事にも興味をもったことに対して質問をしたり、食事の時には食べ物の名前を一つ一つ聞きドイツ語を教えてもらった。私が誤ったドイツ語を話した際には、正確にその誤りを正してくれた。マリクさんが直してくれたドイツ語を改めて話すと「完璧よ」と褒めてくれ、嬉しさとマリクさんの心の温かさを感じると同時に間違えることへの恐れは感じなくなっていった。完璧なコミュニケーションがとれたわけではないが、そこにはドイツ語による会話が確かに成り立っていた。

今回、一ヶ月という短い研修期間の中で今までにない貴重で新鮮な体験をし、それらから多くのことを学ぶことができた。外国語の学習という言葉自体を勉強することに固執しがちだが、他国の言語を学ぶことは異文化を勉強することであり人とのコミュニケーションを実践することでもあると気づいた。ドイツで私が得た学びはドイツ語や異文化だけでなく、出会った人々との会話から対話における力を学ぶこともできた。外国人との会話に対する恐怖心の克服という目標を超える成果をあげられたことに大きな喜びと達成感を感じた。また、その目標以上の成果をあげることができた背景には、一対一というホームステイ環境とマリクさんのおかげでもある。このような貴重な機会を与えてくれた方々や現地で助けてくれた人々に対して感謝し続けたい。語学研修で得た経験を今回きりで終わらせるのではなく、この学びを今後の人生において活かしていく。また、この結果に満足せず喜びとともに自身の反省点も踏まえて今後の成長にも繋げていきたい。

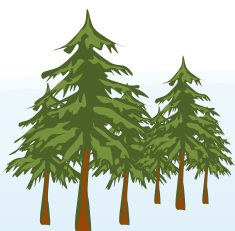
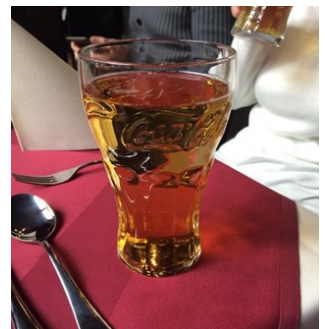
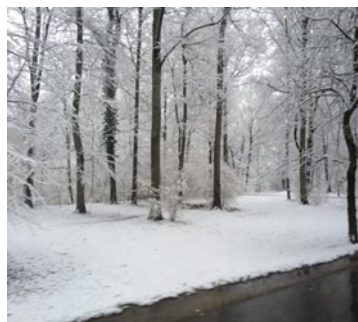


私がドイツに滞在して最初に思ったことが天気のことである。約3週間の滞在期間中曇りや雨、雪などによくみわれた。雲ひとつもない晴天は1、2回ほどしか見なかった。また雪は東京のものより柔らかくサラサラしており、服についた雪は手で払えばすぐ落ちるほどだった。気温は日本よりも寒い。しかし、家の中は防寒性に優れていて寝るときは布団1枚でも十分快適に寝られた。

ドイツの食事は朝、夜が軽め、昼ががっつりだった。特に夜はサラダだけ、スープだけなどとても質素であった。しかし、日本とは食べる量が違った。ドイツの1人前は日本の2.5人前くらいはある。完食するのはとても難しい。日本人は出てきた料理を残すことは失礼なことであり、完食しなければならないという概念があるが、ドイツでは食べられないのであれば普通に残す。食べ物を残すことは失礼ではないし、あまり気にしないそうだ。また、ベジタリアンも少なくない。レストランで食事をするとき、店員に「私はベジタリアンです。」と言えば、肉がなく野菜を中心としたメニューも出してくれる。日本にもベジタリアンはいないわけでもないが、滅多にいない。ドイツ、強いては海外ではベジタリアンは稀ではないのだろう。日本の料理店が外国人客をターゲットにするならば、特別なメニューを考えなければならない。

教育面でも日本と違っている。机は1人1つではなく、長机に好きなように座るスタイルであった。そして生徒に対し、「あなたはどのように思いますか?」「どう感じますか?」など自分で考えさせ、発言させるような自主性に富んだ授業であった。そして進路のシステムも違う。図のようにまず小学校が4年間しかない。そこから基礎学校、専門学校に進む形になっており。義務教育は9年(州によっては10年)である。日本では、小学校、中学校と9年間にわたり義務教育を受ける。義務教育期間は同じだが、ドイツでは、基礎学校を卒業する10歳で、将来の道を選択する岐路に立たされる。私は、まだ幼いのに人生の大事な選択を自分で選択するのは大変であると同時に、自分のことについて真剣に考えるのにいいと考える。

ドイツには多くの博物館があった。古いものはメソポタミア文明から近代的なものは第二次世界大戦のものまで、幅広い時代の展示物があった。そして、多くの博物館には多種のオーディオガイドを用意していた。共通語の英語、近国のイタリア語フランス語ロシア語、アジア圏では日本語と中国語が主に用意されていた。日本のオーディオガイドは英語、中国語ぐらいだろう。東京オリンピックの開催も決まり、今までよりも多くの観光客が日本に訪れる。もっとガイドの種類を増やしてもいいと考える。



二月五日から二十八日という二十五日間の短期留学は自分にとって大きな意味を成すものであった。ドイツとはどのような国なのか、どういった人が暮らし、どのように生活をしているのか、自分の想像していたものと異なる点が多く、発見があった。

ドイツという国

私がミュンヘンに着いて一番初めに感じたことは、人の少なさだ。電車に乗ってかなり空いていることに驚いた。ミュンヘンと言えどドイツ国内の中では三番目に大きな都市である。それでも約140万人ほどいるはずなのには思ったもののよくよく考えればわかることだ。東京の人口約1300万人に比べればほぼ1/10である。渋谷のような人があふれていることがない上に、満員電車に押しつぶされることはないのだ。このことは自分に大きな衝撃であった。

私がドイツに行く前、日本ではテロの脅威・ヨーロッパの情勢不安について多く報道されていた。怖いか怖くないかと言われてしまえば、怖かった。しかしそんなことをいちいち言っていたら、何もできなくなるだろうと思った。それと同時に、実際はどうなっているのか、自分の目で確かめてみたかった。実際に行ってみて、ミュンヘンはとても安全で、且つごみが落ちていない美しい町であった。私は一度も移民を見ることはなく二十五日間を過ごした。治安は安定していて日本と遜色ないと感じるほどであった。人が多く集まる場所ではよく警察官が循環していて安心感もあった。街の美しさは端々に見ることができた。例えば、ファッシングというミュンヘンのお祭りの時にはそこら中に紙吹雪や紙テープが落ちていて、ところどころにビール瓶の破片が散らばっているような状態であった。私は気になったので翌日広場に訪れてみた。すると昨日のことが嘘のようにいつものきれいなミュンヘンの街並みに戻っていて、とても驚いた。このことから偏ったものの見方が、事実を見誤るのだと感じた。百聞は一見にしかずとはこのことをいうのだなと思った。

ドイツ国民

ドイツ人はとても勤勉でまじめであると赴く前までは思っていた。しかしそれは全く違っていた。正確には日本人が思う「まじめ」と、ドイツ人が考える「まじめ」の種類が異なっていると感じた。日本では基本的にすべてを完璧に誤りがないように物事を進めていくといった印象を受ける。辞書で調べると「真剣であること。誠意があること。」などと意味としては出てくる。果たしてドイツではそうであっただろうか。答えは否である。ドイツでは決まったルールを守っている限り少々乱暴な言い方になるが何をしてもかまわないといった柔軟性が見られた。例えば、スーパーのレジの店員は基本的に座っている。しかもおおむね不愛想であったり、隣のレジと話していることもある。これは日本人から見るとおおむねまじめとは捉えられないだろう。むしろ不真面目、この店はどうなっているとなじられてしまうだろう。しかし彼らからしてみればこれが普通であり、私たちの考える「まじめ」とは大きくかけ離れているのである。であるからにして、ドイツ人の考える「まじめ」とは最低限のルールを守っていること上記の場合なら仕事をすることであり、案外適当であるのだと私は感じた。この点は自分の想像と大きく異なっていたため、文化の差異を体感でき、想像することも時に大事ではあるが、実際に経験することがいかに重要か考えさせられた。

文化

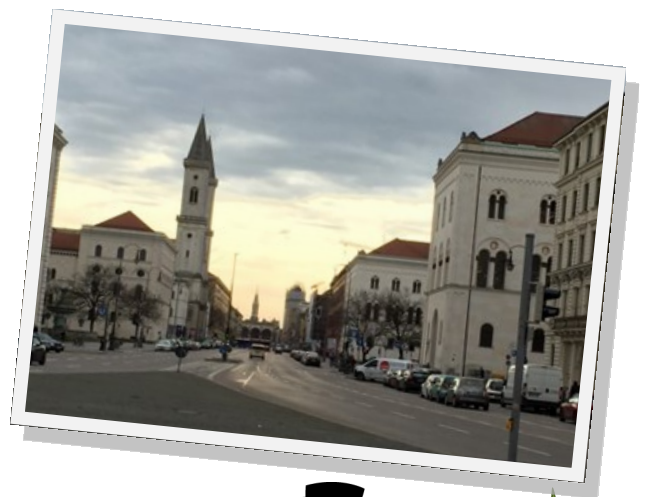
私たちは一泊ではあるが、この短期留学の中でベルリンへ訪れることができた。このことは私の中のドイツをより大きな存在としてとらえるきっかけとなったものであった。ベルリンへ降り立った時、まず空気感が違うと感じた。そして次にミュンヘンにいた時よりもっと国際的であると感じた。この時私は、大きな勘違いをしていることに気が付いた。ミュンヘンがドイツのすべてではないこと、一概に言えないこともあるのだと。

そこには地域ごとに文化があり決してひとくくりにすることはできないのだと感じた。これは多民族国家だからとかではなく日本でもいえることである。

他大学とLMUの学生が混じった授業の中で、ドイツと日本における目に見えない根底に流れるものについて話し合うことがあった。そこで上がったのでコミュニケーションの取り方の違いでハイコンテクスト文化とローコンテクスト文化という話題が持ち上がった。どちらが良いとか悪いとかではなく単純に考えさせられた。言われてみればそうだが、今まで自分が気づかぬうちに浸み込んでいるものにはたいへん気づきにくい。ドイツの学生から見ると、日本人ってこうだよねと言われたとき、確かにとは思うものの当たり前すぎて気が付かないことが多くあった。そういった自分についての新たな発見が得られたのはとてもいい体験となった。

総括

ドイツもといミュンヘンでは多くの経験をした。あたり前とは時に偏見を生むこと、身を持って体験し、直接触れ合うことが大切だと学んだ。自分の見識が増えたのと同時に、日本についてもまた外から改めて客観的に見るができるようになったのは、非常に良かった。今回が初めての海外で不安なことが多くあった。しかし、行ってみて人の対応能力とはすごいものだと感じた。割と何とかなるものだと。長くとも短くとも時間的には感じなかった。現在自分ができる範囲で自分の中で最大限のことはできた。このことを生かして幅広いものの見方をしていき、さらに深くドイツという国を知りたいと思った。



私がこの研修に参加しようと決めたのは高校生のときで、サッカーがきっかけだ。歴史が好きなことも影響して、第二次世界大戦の枢軸国でありながら、現在の日本とは全く違う道を歩んでいるドイツという国に興味を持った。

まずは、歴史について。ミュンヘンに到着した翌日、新市庁舎や周辺の教会などの説明を受けた。これらの建築物が爆撃によって破壊され、その後復元されたものだを知り、今の暮らしと戦後復興は密接な関係にあると感じた。

今回の研修では1泊2日でベルリンへ行く機会もあり、国会議事堂やブランデンブルク門、そしてベルリンの壁や地下トンネルを見学し、東西分断時代の歴史を学んだ。

さらに、研修の最終週にはダッハウ強制収容所を見学した。強制収容所というポーランドのアウシュヴィッツ・ビルケナウを想像する人も多いだろう。しかし、ドイツ国内にも多くの収容所が建てられ、同じく残虐な行為が行われていたのだ。中でも当時の映像は目を覆いたくなるようなもので、ドイツ語だったため完全に理解することはできなかったが、誰が見ても異常さがわかるほどであった。

これらの場所を訪れて印象に残ったことは、ドイツ人は自国の歴史について真摯に向き合っているということ、日本人との歴史認識の差がかなりあるということだ。ドイツでは見学したいいずれの場所でも、親子連れや若者、お年寄りまで幅広い年齢層の人を見かけた。ドイツでは戦争の歴史を教育の早い段階から学ぶと聞いたことがある。それに対し日本はまず、学生がそれほど詳しく戦争の歴史について学ぶ機会がないのではないか。そして、加害の歴史より被害の歴史の方が圧倒的に教育の題材にされやすい。日本軍がアジア諸国に行ったことについて、義務教育や高等学校ですらほぼ学ぶことはないのが現実だ。歴史教育という点でドイツに見習う点は多くあると感じた。

(5つの言語で書かれたダッハウ強制収容所の石碑)

つぎに大きな差を感じたのは、宗教と生活の関わりだ。そもそも、ミュンヘンという名前の由来はキリスト教の僧である「ミュンヒ」からきている。ミュンヘンはカトリック文化の根付いた都市である。町にはかなり多くの教会があり、定時になると大きな



音で鐘が鳴り響く。また、研修へ行った2月の上旬は、「ファッシング」と呼ばれる謝肉祭が行われていた。街の人たちはそれぞれ仮装してお昼からビールを飲み、歌って踊って騒ぐ。道には老若男女問わず人があふれて、まったく知らない人相手に紙吹雪をかけあったりしていた。私たち大正大学生も最終日に仮装して参加し、広場で見知らぬドイツの方からワインを貰ったり、一緒に写真を取ったり、レストランで踊った。私はこれまでの生活でこういった行事に触れる機会がなかったことと、ドイツ人がこんなに羽目を外してはしゃぐイメージを持っていなかったため、かなり驚いた。翌日になると、何事もなかったかのように街はきれいに掃除されており、人々も日常に戻っていて、なおさら面を食らった。

「ドイツ人」といえば、真面目で仕事熱心といったイメージがあるかもしれない。実際に私もミュンヘンへ行くまではそう思っていた。しかし、まさに百聞は一見に如かずであったのだ。まず感じたのは、ドイツ人は賃金に見合った労働しかない。定時になれば仕事を切り上げる。日本では「お客様は神様」扱いされるのに対して、ドイツでは客と店員が同等の立場なのだ。これは東洋大学と成蹊大学とミュンヘン大学の学生で行った講義でも話題と



なった。決して不親切というわけではないのだが、日本のサービスに慣れていると驚くかもしれない。そして日本にはない、「チップ制度」は非常に画期的だと思う。ドイツでレストランなどへ行くとチップを払う機会がある。チップは基本的に払うが、接客態度がよければ多めのチップを、悪ければ払う必要もない。まさに勤務態度に見合った賃金を貰えるわけだ。

そんなすこし冷たく感じるドイツの接客だが、例えばスーパーのレジに並んで自分の番になったときに「Hallo!」と周りのドイツ人と同じく挨拶することで、店員もにこやかに「Grüß Gott!」と返してくれ、会計が終われば「よい午後を」と声をかけてくれるのだ。この点は日本の機械的な接客より人間らしく温かくて好感が持てた。

最後に芸術について。ドイツといえば音楽の国である。私個人が楽器をやっていたこともあり、ドイツの音楽文化は興味深いと感じた。週末にはピアノのコンサートや無料のジャズコンサートまで開催される。町中にもアコーディオンやヴァイオリン、チェロを弾く大道芸人がそこ彼処に居る。日本では絶対に見ない光景に驚きと、ドイツらしさを感じた。

私はこの研修に参加して、一言では表せないほどの経験、知識、価値観を得ることができた。誰もが経験できるわけではない海外の生活を通して、物事のとりえ方が広がった。今年は人数が少なく、そのうえテロの危険性も否定できない中、不安が大きかったが、先生方やチューターのおかげで非常に中身の濃い25日間を過ごすことができた。この研修で培った経験を忘れずに、今後の人生に確実に生かせるようにしていきたい。また、さらにドイツ語を勉強して、今度は自力でドイツ圏に行きたい。





成果は数字で測れない

報告書の中に、学生たちが強く感じ取っている「世界の中の日本」についてこう述べている。

「グローバル化が進み、日本にしながら世界と繋がるのが容易になった今だからこそ、外国に行く必要がなくなったのではなく、むしろ実際に行ってみて自らの目を見たことを、自分自身で考えることがとても重要になってくるのではないかと思う。井の中の蛙になってはもったいない。」「日本の歴史からも分かる。島国だから、ということを使い訳に、なかなか世界と触れ合おうと行動してこなかった自分が、結局はすごく日本人らしいと思った。日本のことは好きであり、日本人らしい自分も好きだが、今回の経験を通して、もっと日本を知るべきだと感じ、さらに考えるだけでなく行動し世界に触れたいと思った。」彼らの言葉ですべてを語っているように思われる。外向的になれずに「内向化」になりつつある大学生たちが多く中で、このような気持ちを少しでもファシリテートできたなら、私達、国際教育を担当する者としては、今後の学生に示すべき操舵は自ずと預けられたのではないかと思う。

今後とも、きっかけをすること、学生自らに気づきと発見を大切にプログラムの推進に邁進したいと考えている。

名前 ミュンヘン大学語学研修 2016

住所 東京都豊島区西巣鴨3-20-1

大正大学

教務部学修支援課

国際

電話番号: 03-5394-3039

FAX 番号: 03-3918-9179

電子メール: kokusai@mail.tais.ac.jjp

